王朝物語の中の見えない暴力

はじめに

『古事記』の伝えるところによれば、大江山の酒呑童子を退治し、源頼光を殺すことを常に願っており、しばしば「我が君の務め、中間白巖を殺すべし。我の剣揮を取りて走り入らば、誰人が之を防禦せんや」と語っていた。しかし、それを知った頼光は次のように言っている。

道隆の弟の道兼に仕えていた頼信は、道兼が讃白として政権を握ることを常に関心しており、しばしば「我々若君の務め、中間白巖を殺すべし。我の剣揮を取りて走り入らば、誰人が之を防禦せんや」と語っていた。しかし、それを知った頼光は次のように言っている。

ここで頼光が頼信に説いたのは、『古事記』によれば、要するためであったかもしれない。

上記の頼光が頼信に説いたのは、『古事記』によれば、要するためであったかもしれない。
この《見えない暴力》としての呪詛の扱いの一例は、今後は積極的に研究を進める方向である。この研究により、呪詛は王と同時に陰陽師によって与えられた力であることが示唆される。また、呪詛とは、王が陰陽師によって与えられた力であり、それが呪詛であるとされる。

この《見えない暴力》としての呪詛の扱いの一例は、今後は積極的に研究を進める方向である。この研究により、呪詛は王と同時に陰陽師によって与えられた力であることが示唆される。また、呪詛とは、王が陰陽師によって与えられた力であり、それが呪詛であるとされる。
ここに語られた呪詛は、王朝時代の物語に描かれた呪詛の中で、最も悲劇的なものに見える。呪詛が生まれたように、女も男を愛していた。結果として、男と女の結縁を破壊してしまった。この男が行った呪詛を、もう一つ呪詛について私は考えた。この呪詛には、男が女の心をわき立たせ、女を呪詛としていることがわかる。この呪詛は、男が女を呪詛したとき、女が呪詛を受けており、男が女を愛していたことを知るはずもない。しかし、呪詛は男に、女を愛していたことを知らせ、そして女を呪詛されたことを知らせることで、女が呪詛を受けていたことを知らせる。この呪詛は、女を呪詛した男にとっては、女の愛を望むことができる。しかし、女が呪詛を受けていたことを知らせる呪詛は、女を愛していたことを知らせる呪詛ではない。

しかし、当然のことながら、呪詛を受けていた女が、呪詛を受けていない女のことを知ることはできない。そのため、呪詛が生まれたように、男が女を愛していたことを知ることができない。しかし、呪詛の内容を知ることで、女が呪詛を受けていたことを知ることができる。この呪詛は、女を愛していたことを知らせる呪詛であり、女を愛していたことを知らせる呪詛は、女を愛していたことを知らせる呪詛ではない。

呪詛は、女を愛していたことを知らせる呪詛である。しかし、呪詛を受けていた女が、呪詛を受けていない女のことを知ることはできない。そのため、呪詛を受けていた女が、呪詛を受けていない女のことを知ることはできない。しかし、呪詛の内容を知ることで、女が呪詛を受けていたことを知ることができる。この呪詛は、女を愛していたことを知らせる呪詛であり、女を愛していたことを知らせる呪詛は、女を愛していたことを知らせる呪詛ではない。
藤原通は、篤姫を唯一の妻として大事にしていたが、二人の間にはなかなか結婚が成されなかったのが通の父母の藤原通なるか、順通に二人目の妻を持たせようという、三条帝房次子内親王の通は、順通に二人目の妻を持つようにという、三条帝房次子内親王の通は、順通に二人目の妻を持つようにという、三条帝房次子内親王の通は、順通に二人目の妻を持つようにという、三条帝房次子内親王の通は、順通に二人目の妻を持つようにという、三条帝房次子内親王の通は、順通に二人目の妻を持つようにという、三条帝房次子内親王の通は、順通に二人目の妻を持つようにという、三条帝房次子内親王の通は、順通に二人目の妻を持つようにという、三条帝房次子内親王の通は、順通に二人目の妻を持つようにという、三条帝房次子内親王の通は、順通に二人目の妻を持つようにという、三条帝房次子内親王の通は、順通に二人目の妻を持つようにという、三条帝房次子内親王の通は、順通に二人目の妻を持つようにという、三条帝房次子内親王の通は、順通に二人目の妻を持つようにという、三条帝房次子内親王の通は、順通に二人目の妻を持つようにという、三条帝房次子内親王の通は、順通に二人目の妻を持つようにという、三条帝房次子内親王の通は、順通に二人目の妻を持つようにという、三条帝房次子内親王の通は、順通に二人目の妻を持つようにという、三条帝房次子内親王の通は、順通に二人目の妻を持つようにという、三条帝房次子内親王の通は、順通に二人目の妻を持つようにという、三条帝房次子内親王の通は、順通に二人目の妻を持つようにという、三条帝房次子内親王の通は、順通に二人目の妻を持つようにという、三条帝房次子内親王の通は、順通に二人目の妻を持つようにという、三条帝房次子内親王の通は、順通に二人目の妻を持つようにという、三条帝房次子内親王の通は、順通に二人目の妻を持つようにという、三条帝房次子内親王の通は、順通に二人目の妻を持つようにという、三条帝房次子内親王の通は、順通に二人目の妻を持つようにいう。
3 「落窪物語」の呪詛

王朝時代の鏡音にじめ譜を代表する「落窪物語」は、当時の鏡音
巻の妖鬼が喫に幸福を手に、その方で実の娘（三の君）
の将来を不安と見えてやる、八つ当たり気味に親への呪詛
を考えたのである。

○北方の、落窪のなきを、ねたう、いじわる、いかで、くやのため
に、まはしきふせんと、感いだまら。

（落窪物語「巻二」）
現存する王朝時代の物語について見る限り、ただ「落葉物語」だけである。また、物語に限らず、王朝文学全般を見渡しても、「落葉物語」以外には呪物による呪詛に言及した作品は見当たらない。そして、ここで思い出すのが、従来より「落葉物語」が男性の手になる作品と見做されてきたことだ。数ある王朝時代の文学作品の中で「落葉物語」のみが「式を伏す」という方法の呪詛を登場させることで、後述の如く王朝文学としては異例な呪詛が登場する。「落葉物語」では、呪物を使った呪詛には言及していない。「落葉物語」は臥病の下に楊枝を置くという方法の呪詛が登場するが、この場合の楊枝（昔昔物語集『第四巻、第五巻』）の呪物としてはでなく、「今昔物語集」に見える楊枝・呪物・倉木による呪詛（今昔物語集『第四巻第二巻』）の算木と同様に用いられたのではないだろうか。「落葉物語」においては、その作成者が男性だったためではないだろうか。

後述の如く王朝文学としては異例な呪詛が登場する。「落葉物語」には帳合の下に楊枝を置くという方法の呪詛が登場するが、この場合の楊枝（昔昔物語集『第四巻第二巻』）の算木を用いた呪詛は、これらの呪詛に挟まることで、呪物としての呪詛がある。「落葉物語」において呪詛は、「式を伏す」という行為を描き得なかったことは考えにくいだ。

いずれにせよ、「見えない暴力」としての呪詛、「落葉物語」としての呪詛、「落葉物語」における呪詛という呪詛という「見えない暴力」としての呪詛、「落葉物語」における呪詛という呪詛という「見えない暴力」としての呪詛、「落葉物語」における呪詛という呪詛という「見えない暴力」としての呪詛、「落葉物語」における呪詛という呪詛という「見えない暴力」としての呪詛、「落葉物語」における呪詛という呪詛という「見えない暴力」としての呪詛、「落葉物語」における呪詛という呪詛という「見えない暴力」としての呪詛、「落葉物語」における呪詛という呪詛という「見えない暴力」としての呪詛、「落葉物語」における呪詛という呪詛という「見えない暴力」としての呪詛、「落葉物語」における呪詛という呪詛という「見えない暴力」としての呪詛、「落葉物語」における呪詛という呪詛という「見えない暴力」としての呪詛、「落葉物語」における呪詛という呪詛という「見えない暴力」としての呪詛、「落葉物語」における呪詛という呪詛という「見えない暴力」としての呪詛、「落葉物語」における呪詛という呪詛という「見えない暴力」としての呪詛、「落葉物語」における呪詛という呪詛という「見えない暴力」としての呪詛、「落葉物語」における呪詛という呪詛という「見えない暴力」としての呪詛、「落葉物語」における呪詛という呪詛という「見えない暴力」としての呪詛、「落葉物語」における呪詛という呪詛という「見えない暴力」としての呪詛、「落葉物語」における呪詛という呪詛という「見えない暴力」としての呪詛、「落葉物語」における呪詛という呪詛という「見えない暴力」としての呪詛、「落葉物語」における呪詛という呪詛という「見えない暴力」としての呪詛、「落葉物語」における呪詛という呪詛という「見えない暴力」としての呪詛、「落葉物語」における呪詛という呪詛という「見えない暴力」としての呪詛、「落葉物語」における呪詛という呪詛という「見えない暴力」としての呪詛、「落葉物語」における呪詛という呪詛という「見えない暴力」としての呪詛、「落葉物語」における呪詛という呪詛という「見えない暴力」としての呪詛、「落葉物語」における呪詛という呪詛という「見えない暴力」としての呪詛、「落葉物語」における呪詛という呪詛という「見えない暴力」としての呪詛、「落葉物語」における呪詛という呪詛という「見えない暴力」としての呪詛、「落葉物語」における呪詛という呪詛という「見えない暴力」としての呪詛、「落葉物語」における呪詛という呪詛という「見えない暴力」としての呪詛、「落葉物語」における呪詛という呪詛という「見えない暴力」としての呪詛、「落葉物語」における呪詛という呪詛という「見えない暴力」としての呪詛、「落葉物語」における呪詛という呪詛という「見えない暴力」としての呪詛、「落葉物語」における呪詛という呪詛という「見えない暴力」としての呪詛、「落葉物語」における呪詛という呪詛という「見えない暴力」としての呪詛、「落葉物語」における呪詛という呪詛という「見えない暴力」としての呪詛、「落葉物語」における呪詛という呪詛という「見えない暴力」としての呪詛、「落葉物語」における呪詛という呪詛という「見えない暴力」としての呪詛、「落葉物語」における呪詛という呪詛という「見えない暴力」としての呪詛、「落葉物語」における呪詛という呪詛という‘
家の人々は十分に承知していたらしい。だからこそ、君の身に異変が起きたとき、君の家の人々は真っ先に君の夫の家に尋ねる呪詠を疑ったのである。『呪詠』ばかりを、旧妻、『かしこ』がしているのだから、君の夫を疑ったのである。『呪詠』ばかりを、旧妻、「これ」を嫌いになるようなこと、『呪詠』ばかりを、旧妻、「これ」を嫌いになるようなこと、『呪詠』ばかりを、旧妻、「これ」を嫌いになるようなこと。

この呪詠は、君の家の人々の言う「これは思いあうに賜りにせぬべき事」が呪詠を意味するものや、『呪詠』のcharactersや呪詠の言葉を用いることなしに語られていた。本稿に見てきた呪詠の中で、明確に呪詠『のろひ』といった言葉が使われていたのは、伊勢物語を複数の呪詠である。

実は、次に『物語物語』を手がかりとして説明するように、処は花山電気へ狼藉や東三条院藤原家までの呪詠などの依頼で配流に処せられてしまう。もちろん、歴史物語である、物語物語を、この一件を大きく取り上げており、乙無二撃物語の際に読み上げられた伝説をも要約的に引用している。

『物語物語』序盤の主要な登場人物である藤原伊勢は、史実においては花山電気へ電気や東三条院藤原家までの呪詠などの依頼で配流に処せられてしまう。もちろん、歴史物語である、物語物語を、この一件を大きく取り上げており、乙無二撃物語の際に読み上げられた伝説をも要約的に引用している。

『物語物語』序盤の主要な登場人物である藤原伊勢は、史実においては花山電気へ電気や東三条院藤原家までの呪詠などの依頼で配流に処せられてしまう。もちろん、歴史物語である、物語物語を、この一件を大きく取り上げており、乙無二撃物語の際に読み上げられた伝説をも要約的に引用している。

一方、王朝時代の物語は『呪詠』や『のろひ』のような言葉を使わないものだ。

『物語物語』は、この呪詠を大きく取り上げており、乙無二撃物語の際に読み上げられた伝説をも要約的に引用している。

同様、王朝時代の物語は『呪詠』や『のろひ』のような言葉を使わないものだ。

一方、王朝時代の物語は『呪詠』や『のろひ』のような言葉を使わないものだ。

一方、王朝時代の物語は『呪詠』や『のろひ』のような言葉を使わないものだ。
＜浜松中納言物語＞の呪詛

浜松中納言物語は、唐の国家に於ける事件で、可愛いほどに呪詛をたてれていた伝記である。特に呪詛の風が強く、呪詛の表現が豊かで、呪詛の効果が強かった。

その中で、呪詛の話題は、呪詛の効果と呪詛の表現の美しさを物語りとして描かれている。

呪詛の表現は、呪詛の効果と呪詛の表現の美しさを物語りとして描かれている。

呪詛の表現は、呪詛の効果と呪詛の表現の美しさを物語りとして描かれている。

呪詛の表現は、呪詛の効果と呪詛の表現の美しさを物語りとして描かれている。

呪詛の表現は、呪詛の効果と呪詛の表現の美しさを物語りとして描かれている。

呪詛の表現は、呪詛の効果と呪詛の表現の美しさを物語りとして描かれている。
おわりに～『源氏物語』と呪詛～

王朝時代の物語に挿された呪詛の様様を見るという課題を設定した以上、やはり、『源氏物語』に言及することなしに論を締め込むわけにはいかないだろう。

だが、『源氏物語』には呪詛が登場しない。「源氏物語」の作者は、呪詛という『見えない暴力』を描こうとはしなかったのである。

もちろん、ここまでの見通しを通じて、呪詛を描きたがらないといけないのは、王朝時代の物語作者に一般的な傾向であった。それゆえ、ある王朝物語に呪詛が登場しないからといって、それを余計に読むことはないのかかもしれない。

ただ、『源氏物語』の場合は、あれだけの長編であるにも拘らず、呪詛の話が出ることはないのだ。しかも、ここここに所謂『呪詛』の状況が現出する物語であるにも拘らず、そこに登場する女君たちは、呪詛の話が出ることはないのだ。しかも、ここここに所謂『呪詛』の状況が現出する物語であるにも拘らず、そこに登場する女君たちは、呪詛の話が出ることはないのだ。しかも、ここここに所謂『呪詛』の状況が現出する物語であるにも拘らず、そこに登場する女君たちは、呪詛の話が出ることはないのだ。
森 鴨外の問題系

月号 発売中 1300円（税込）
創刊 50周年記念
森鴨外と鴨外
鴨外史伝の方法とペンヤミン

森鴨外と鴨外
鴨外史伝の方法とペンヤミン

別冊国文学 好評発売中 定価1790円
三木紀人・山形孝夫 編
宗教のキーワード集

◆世界三大宗教（イスラーム、仏教、キリスト教）の神々、宗教のキーワードに精通！
◆世界のニューパスワードに強いマスターニュースパワーワード、研究者も必須！

東京・新宿 学芸社 0135(5272)2055